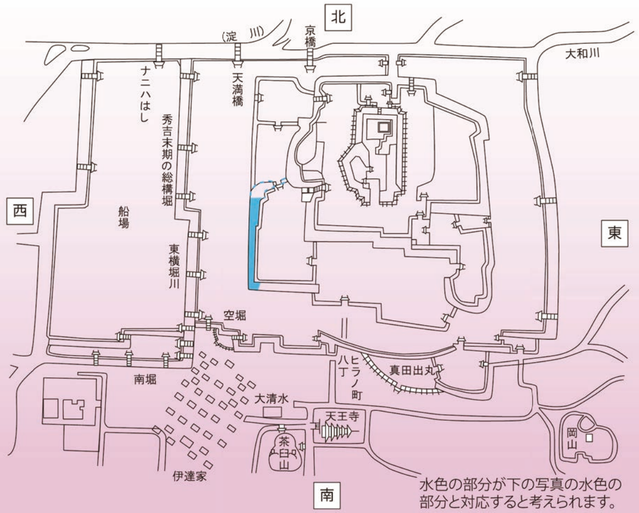
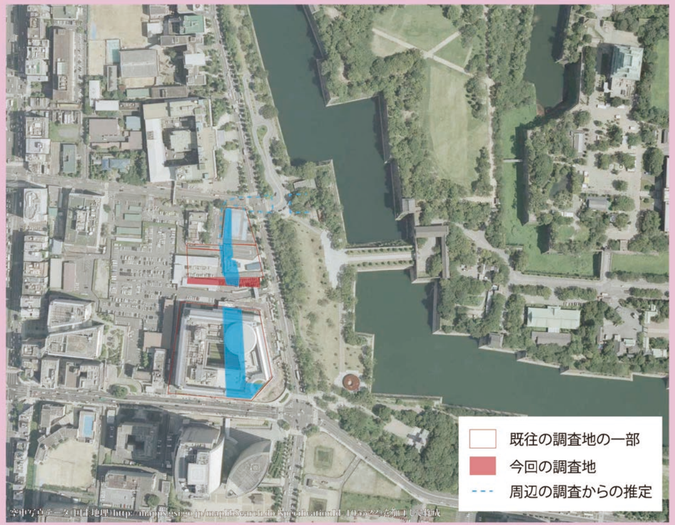


『僊台武鑑』「大坂冬の陣配陣図」
（渡辺　武氏作成の原図を一部改変）



豊臣期堀位置図（周辺の調査成果より）

大坂城略年表

年号	西暦	事項	年号	西暦	事項
天正８	1580	織田信長との抗戦により、石山本願寺焼亡	慶長元	1596	慶長の大地震
天正10	1582	本能寺の変、信長が討たれる	慶長２	1597	朝鮮再出兵(慶長の役)
天正11	1583	賤ヶ岳の戦い、羽柴秀吉が柴田勝家を破る	慶長３	1598	大坂城三の丸築造開始
		秀吉、摂津を占有し大坂城本丸築城を開始			秀吉没
天正12	1584	小牧長久手の戦い、秀吉、徳川家康と和す	慶長５	1600	関ヶ原の戦い
		大坂城本丸完成	慶長８	1603	家康、征夷大将軍に任ぜられ、江戸幕府を開く
天正13	1585	秀吉、関白に任ぜられる	慶長10	1605	徳川秀忠、征夷大将軍に任ぜられる
天正14	1586	大坂城二の丸築造開始	慶長19	1614	大坂冬の陣
		秀吉、太政大臣に任ぜられ、豊臣の姓を賜る	慶長20	1615	大坂夏の陣
天正16	1588	大坂城二の丸完成			豊臣秀頼、淀殿自刃、豊臣氏滅亡
天正18	1590	小田原の北条氏降伏、秀吉の天下統一成る	元和６	1620	徳川大坂城築城工事開始(１期工事)
天正19	1591	秀吉、関白職を甥の豊臣秀次に譲り太閤と号する	元和10	1624	徳川大坂城築城工事（２期工事）
文禄元	1592	秀吉、朝鮮出兵(文禄の役)	寛永５	1628	徳川大坂城築城工事（３期工事）
文禄３	1594	大坂城惣構築造開始	寛永６	1629	徳川大坂城築城工事終了
文禄４	1595	秀吉、秀次の関白職を剥奪し、秀次自刃			

年表の色分けと対応しています。

豊臣期大坂城外郭推定図

重粒子線がん治療施設整備運営事業に伴う
大坂城跡の発掘調査現地説明会資料
編集発行　公益財団法人大阪府文化財センター
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号
発行日　平成27年４月18日

重粒子線がん治療施設整備運営事業に伴う

公益財団法人大阪府文化財センター
平成２７年４月１８日

大坂城跡の発掘調査

公益財団法人大阪府文化財センターは、大阪市中央区大手前三丁目地内において、地方独立行政法人大阪府立病院機構が行う、重粒子線がん治療施設整備運営事業に伴う発掘調査を実施しています。

調査では、これまでに見つかっている『僊台武鑑』「大坂冬の陣配陣図」に描かれた、豊臣大坂城の二の丸大手口（生玉口）を逆コの字状に囲む堀の一部分を検出しました。また、調査地内は徳川大坂城築城に伴うと考えられる大規模な造成工事の跡（本資料では、その深い部分を落ち込みと呼んでいます）が見つかりました。

堀は、南北に延びており長さ約11m、幅約18m、深さは約2.6mを測り、堀底には堀障子が設けられています。堀は埋土の様子から大きく上・下層に分かれます。下層は堀が機能していた時のもの、上層が慶長19（1614）年の大坂冬の陣講和後に埋められた時のものです。なお、堀の上面には元和6（1620）年徳川大坂城築城時のものと考えられる、調査区全体を約５mの厚さで分厚く覆う盛土が見られました。

落ち込みからは、大きな石材が40点近く見つかりました。後で詳しく述べますが、石材は質や形状、加工痕などから大きく2種類に分けられます。１つは、豊臣大坂城または、豊臣期の大名屋敷に使われた石材。もう１つは、徳川大坂城築城に使われた石材の一部です。これらの石材が、徳川大坂城築城に関わる落ち込みから出土した理由は今のところ不明です。

今年は、大坂の陣から数えて400年にあたります。この年に、豊臣から徳川へ移ってゆく大坂城の歴史の一部を垣間見る資料が得られたことに、不思議な縁を感じます。

堀から出土した様々な国産陶器や輸入磁器

家紋瓦と鬼瓦

金箔を貼った様々な瓦

徳川期の盛土に利用された大坂夏の陣の焼土層

大坂夏の陣の戦火で焼け歪んだ瓦や陶磁器

堀からは陶磁器類以外に、箸や下駄などの日常使いの品から建築部材などの多様な木製品、縄や布、当時食したと考えられる貝類（サザエやカキ等）や魚の骨・鱗といった食物残滓（食べかす）など様々な遺物が多量に廃棄されていました。これらの多くは大坂冬の陣の後に堀を埋め立てた土砂に含まれています。中でも箸が多量に出土することから、堀の埋め立ては大勢の人数で一気に行なったという往時の喧騒を彷彿とさせます。

また、堀を覆い隠すような大規模な造成を行なった徳川期の盛土は、周辺（特に調査地より西側）の土砂を削って、西側から東側に向けて流し込むようにして盛られています。写真のように大坂夏の陣による焼土層が利用されている部分もありました。周辺の土砂を削ったことによって、盛土の中には豊臣期の遺物が多量に含まれています。特に目を引くものは、多様な桃山陶磁器と焼け歪んだ瓦や陶磁器、焼けた土壁です。前者は華やかな当時の茶陶を、後者は大坂夏の陣における戦火の凄まじさを雄弁に我々に語ってくれます。

③落ち込みから出土した石材群

④豊臣期の石材
（焼けて外面が剥落しています）

⑤徳川期の石材
（矢穴列痕が見られます）

⑥石材に穿たれた矢穴列

⑦石材に残された矢穴列痕

③～⑦　落ち込みには、大坂夏の陣の際の焼けた瓦や陶磁器・土壁などが入っていることから、慶長20（1615）年大坂夏の陣以降に埋められたと考えられます。掘削時期の判断は難しいですが、徳川大坂城の本格的な築城が元和６（1620）年からであることから、掘削はこの時期に推測できます。また、埋土中からの出土遺物に伊万里焼が見られないことから、下限は、1630年前後と考えられます。

落ち込み内から見つかった石材は、質や形、加工痕から大きく２種類に区分することができます。

１つは、0.6～1mまでの大きさの自然石で、砂岩や生駒西麓の花崗岩を含みます。矢穴や矢穴痕は見られません。これらの特徴から豊臣大坂城の石垣または、大名屋敷に使われた石と考えられます。なお、その内の１石に被熱痕跡が認められます。

もう１つは、0.8～1.5mほどの切石で、六甲山系の花崗岩を主とします。矢穴列や矢穴列痕が見られ、矢穴の形などの特徴から徳川大坂城築城の３期工事の内、１期目までのものと考えられます。ただ、石垣には不向きな形をしており、いわゆる端石と呼ばれるもので、石垣には使われなかった部分です。

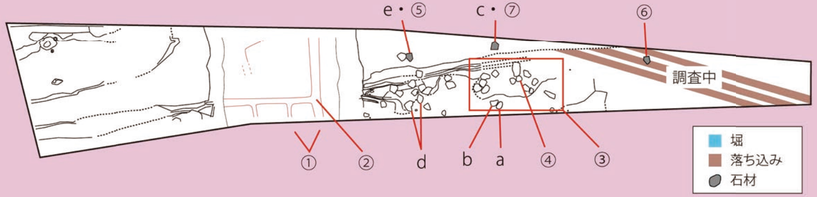
これらの事から、石材は元和６（1620）年に開始される徳川大坂城築城に伴う造成工事により掘削された落ち込みを埋める際、不要品として廃棄されたもので、先述したように出土遺物の傾向を合わせて考えれば、落ち込みが埋まった時期の下限は、1630年以前と考えられます。

①400年ぶりに姿を現した堀

②堀底に設けられた堀障子の断面

①　見つけた堀の長さは11mですが、過去の調査で見つかった部分を合わせると、南北約240mの長さになります。また、堀の周囲には、豊臣期の地面が全く残っていない事から、堀の上部は削られていると考えられます。北側の調査地では、高く削り残された地山面を見つけており、この地山の高さを基に堀の深さを復原すると約5.2m以上になります。実際に検出した深さは2.6mですから、半分以上も削られていることになります。また、幅を復原すると約23.6m以上となります。堀には石垣が築かれておらず、斜面はつるつるとした粘質土がむき出しで、約30度の傾斜をもつため、非常に登りにくいものとなっています。

②　さらに堀底には、壁が設けられており、堀に入った敵を動きにくくする工夫（堀障子）がなされています。壁の高さはまちまちですが高い所で約40cm、幅は上端で40～60cmあります。その上、泥や水が溜まっていたならば、堀に入った敵は身動きが取れなかったことでしょう。



概略平面図（下が北）

石材に記された墨書き符号と刻印

落ち込みから出土した石材には、墨書き符号や刻印が見つかりました。「a」～「e」は、墨書き符号、「a″」は刻印です。

「a」と「a″」は同じ石に記されていました。また、１つの石に同じ墨書き符号が複数記されていたものもありました（b・c・e）。「d」は隣り合う石に記されていました。